

2011年12月17日(土)、18日(日)

## 日本歴史言語学会 設立総会・第一回大会

於 大阪大学 豊中キャンパス 豊中総合学館 (旧称文系総合研究棟)

第一日 2011年12月17日(土)

12:30	受付開始	於 講義室 301 前
13:00~14:30	日本歴史言語学会 設立総会	於 講義室 301
14:30~15:00	入会手続	
15:00	日本歴史言語学会 第一回大会 開会	
	開会の辞 会長就任挨拶	日本歴史言語学会会長
	開催校挨拶	大阪大学文学研究科長 片山 剛
15:20~17:00	日本歴史言語学会 設立記念講演会	
15:20~16:10	設立記念講演 イネ・コメの比較言語学	金沢大学・静岡県立大学名誉教授 元日本言語学会会長 松本 克己
16:10~17:00	設立記念講演 Ego とワタクシ	関西外国語大学名誉教授 新村 出記念財団理事長 堀井 令以知
17:00	記念撮影	
17:30~19:30	懇親会	於 福利会館 三階食堂

### 設立記念講演者のご紹介

**松本克己**先生 1929年長野県生まれ、東京大学文学部言語学科、同大学院にて高津春繁博士、服部四郎博士等に師事。金沢大学、筑波大学、静岡県立大学教授を経て金沢大学・静岡県立大学名誉教授、元日本言語学会会長。専攻は印欧語比較言語学、言語類型論。最近のご著書:『世界言語への視座:歴史言語学と言語類型論』(三省堂 2006)、『世界言語のなかの日本語:日本語系統論の新たな地平』(三省堂 2007)、『世界言語の人称代名詞とその系譜:人類言語史5万年の足跡』(三省堂 2010)。

**堀井令以知**先生 1925年京都生まれ、京都大学文学部言語学科、同大学院にて新村 出博士、泉井久之助博士等に師事。関西大学、愛知大学、南山大学、関西外国語大学教授等を経て関西外国語大学名誉教授、新村 出記念財団理事長。主なご著書:『語源大辞典』(東京堂 1988)、『語源をつきとめる』(講談社現代新書 1990)、『外来語語源辞典』(東京堂 1994)、『比較言語学を学ぶ人のために』(世界思想社 1997)、『ことばの不思議』(おうふう 1998)、『一般言語学と日本語学』(青山社 2003)、『ことばの由来』(岩波新書 2005)、『京都語を学ぶ人のために』(世界思想社 2006)等多数。

第二日 2011年12月18日(日)

## 研究発表会

	第一会場 講義室 301		第二会場 講義室 302	
	発表者	司会者	発表者	司会者
10:00 ~10:30	仲尾周一郎 (京都大学(院))	神山孝夫 (大阪大学)	劉洪岩 (九州大学(院))	金水 敏 (大阪大学)
	アラビア語ピジンの歴史的再構: 19世紀末南スーダンにおけるビンバシ・アラビア語		中世から近代までの ヲ格複合助詞の文法化の特徴について	
10:35 ~11:05	齋藤有哉 (京都大学(院))	神山孝夫 (大阪大学)	黒木邦彦 (甲南女子大学)	金水 敏 (大阪大学)
	歴史言語学の方法論的基礎		日本語の過去表現の構造とその変化	
11:10 ~11:40	菅野開史朗 (ラトビア大学)	井上幸和 (神戸市外国語大学)	大塚恵子 (東京造形大学)	岡島昭浩 (大阪大学)
	エンゼリーンス没後 50 年によせて		言語接触を想定した 日本語方言アクセント史の試み	
11:45 ~12:15	本城二郎 (大阪大学)	岡本崇男 (神戸市外国語大学)	Irwin, Mark (山形大学)	岡島昭浩 (大阪大学)
	チェコ語単文の歴史的変化とプラハ言語学派: 時代別チェコ語訳聖書テキストの要素分割性と 機能構造を中心として		Replication of Epenthetic Vowels in Japanese Loanwords from the 16 <sup>th</sup> to the 21 <sup>st</sup> century	
12:15~13:00 昼食休憩				
13:00 ~13:30	田口善久 (千葉大学)	藤井文男 (茨城大学)	山泉 実 (東京外国語大学)	町田 健 (名古屋大学)
	ミエン語系諸語の系統と分類について		「気に入る」の項の格の変異と語彙化	
13:35 ~14:05	輿石哲哉 (実践女子大学)	服部義弘 (静岡大学)	山部順治 (ノートルダム清心女子大)	町田 健 (名古屋大学)
	英語の語形成史と形容詞のタイプについて		日本語で現在進行中の語順変化	
14:10 ~14:40	織田哲司 (東京理科大学)	鈴木誠一 (関西外国語大学)	山口和彦 (札幌医科大学)	松村一登 (東京大学)
	「流れる」、「切る」、「強い」を表す印欧語根の 音象徴性について: <i>Beowulf</i> における 語頭音 <i>fl-, sc-, wac-</i> などの用例とともに		アジアの言語に見られる可能形式の文法化	
14:45 ~15:15	江藤裕之 (東北大学)	鈴木誠一 (関西外国語大学)	渡部正路	板橋義三 (九州大学)
	語源学における <i>science vs. imagination</i> : 「イメージの語源学」再考		日本語語彙の生成構造	
15:20 ~15:50	田中俊也 (九州大学)	菅原和竹 (宮城教育大学)	野田恵剛 (中部大学)	板橋義三 (九州大学)
	ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の 過去複数形をめぐる考察		日本語における古代漢語借用語と 日本語の系統論	
15:55 ~16:25	清水 誠 (北海道大学)	石井正人 (千葉大学)		
	ゲルマン語の「 <i>n</i> の脱落」と 形容詞弱変化の「非文法化」			
16:30	閉会の辞 日本歴史言語学会副会長			

## 大阪大学 豊中キャンパスへのアクセス

### ① 新幹線をご利用の場合

**新大阪**

↙ 乗り換え ↘

#### 選択肢 1

地下鉄御堂筋線を利用

メリット： 乗り換えが楽  
最寄駅からやや近い、起伏小  
デメリット： 運賃が高い（計 560 円）  
柴原駅周辺での食事の便悪し

#### 選択肢 2

JR 京都線（＝東海道線）を利用

メリット： 運賃が安い（阪急線 220 円のみ）  
梅田、石橋での食事の便良し  
デメリット： 梅田乗り換えが面倒  
石橋駅からやや遠い、起伏大

13 分  
320 円  
**新大阪**  
↓  
千里中央行き  
**千里中央**

大阪モノレール線へ乗り換え

5 分  
240 円  
**千里中央**  
↓  
大阪空港行き  
**柴原**

キャンパス中心部まで徒歩約 10 分

4 分  
**新大阪**  
↓  
大阪方面行き  
**大阪**

阪急宝塚線へ乗り換え

急行 15 分  
220 円  
**梅田**  
↓  
宝塚方面行き  
**石橋**

キャンパス中心部まで徒歩約 15 分

### ② 飛行機をご利用の場合

**大阪空港（伊丹空港）**

大阪モノレール線へ乗り換え

**大阪空港**

6 分  
240 円  
↓  
門真市行き

**柴原**

キャンパス中心部まで徒歩約 10 分

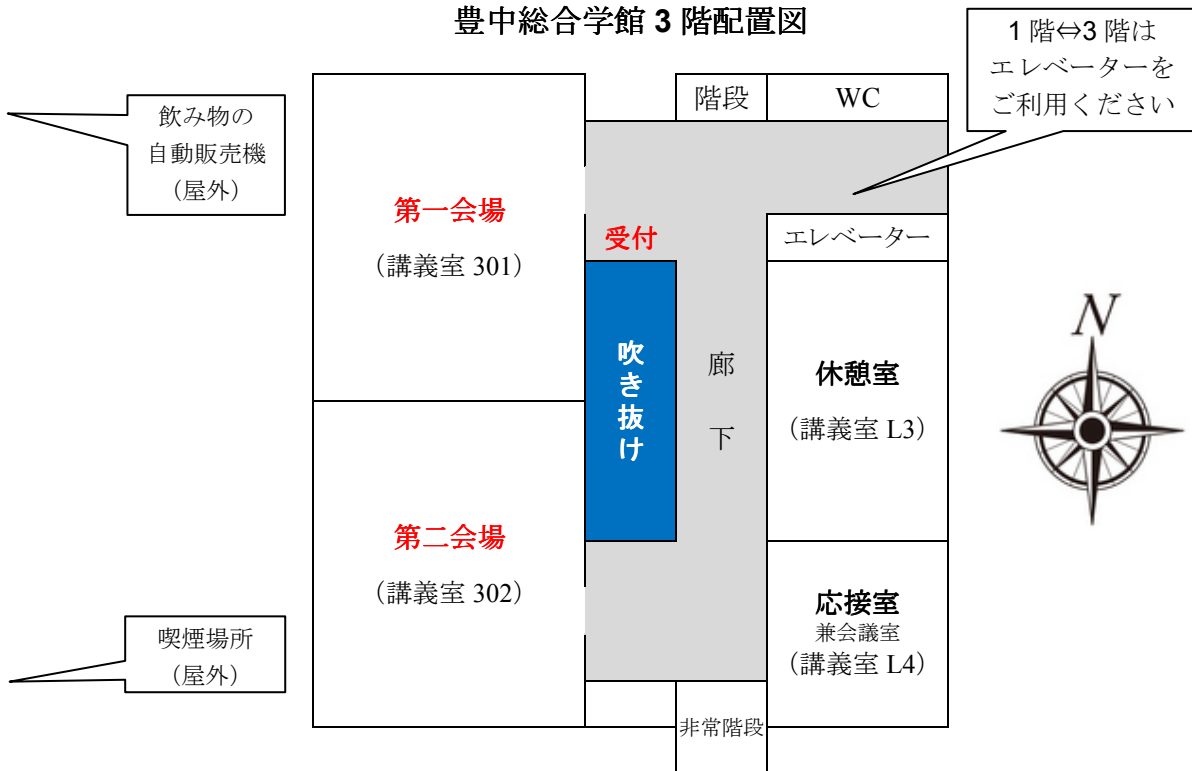
大阪空港から会場までタクシーを利用すれば、所要時間は約 10 分、料金は 1000 円程度です。

関西国際空港のご利用はお勧めできません。ご事情により同空港をご利用の場合は、なんば駅より地下鉄御堂筋線（①選択肢 1）、あるいは大阪駅から阪急宝塚線（①選択肢 2）をご利用ください。なんば駅あるいは大阪駅まで特急を利用しても、会場までは 2 時間近くを要すると思われます。

最寄駅から 豊中総合学館（旧称 文系総合研究棟）へのアクセス



豊中総合学館 3階配置図



当日、建物入口は施錠されていますが、担当の者が付近に常駐し随時解錠します。

暫定事務局より

### お知らせとお願い

- ・準備の都合上、やむを得ない場合を除き、本年 11 月末までにメール（あるいは郵便）で出欠のご連絡をお寄せください。あわせて、17 日懇親会（一般 4000 円、学生 2000 円程度の予定）の出欠、18 日昼食弁当（500 円前後）の要不要についてもお記してください。
- ・事務簡素化と転記ミス防止のため、やむを得ない場合を除き、入会申込書は事前にメール添付（あるいは郵便）でお寄せください。申込書は下記ウェブサイト内にあります。
- ・会員に負担いただく**学会費**の金額は 12 月 17 日（土）の設立総会で決定されます。金融機関の口座開設は後日となりますので、今年度の学会費については受付にて納入ください。
- ・12 月 18 日（日）、学内の食堂・売店は営業していません。上記**弁当**のご利用をお勧めします。
- ・メールでご連絡いただく際は、散逸防止のため、件名に「日本歴史言語学会」を含めてください。
- ・暫定事務局は設立総会・第一回大会とともにその任務を終えます。以後のお問い合わせは設立総会で発足する正式な執行部・事務局までお願いいたします。

思えば 2010 年 12 月 11 日に大阪大学で開催された The 19<sup>th</sup> Indo-European Colloquium of Japan（＝大阪言語研究会 第 168 回公開講演会）において印欧語学あるいは歴史言語学全般を扱う学会の設立を望む声が高まり、その勢いに押されて設立準備の実務にかかわらせていただきました。発起人の方々を中心として、これまで様々の点でご協力くださった方々に篤くお礼申し上げるとともに、今まさに誕生しようとしている日本歴史言語学会が今後生々発展するよう、また、泉井久之助博士、蛭沼寿雄博士を中心とした尊敬すべき先達諸兄の熱意の結晶である上記 Colloquium の伝統がここに生き続けることを祈念してやみません。設立準備の過程においては、不慣れから色々とは至らないところはあったかと思いますが、何卒ご海容いただきまして、今しばらくよろしくご協力ください。

2011 年 9 月吉日 神山記

#### 日本歴史言語学会

<http://www.jp-histling.com/>

暫定事務局

〒560-8532

大阪府豊中市待兼山町 1-5

大阪大学文学研究科

神山孝夫研究室内

kamiyama [at] let.osaka-u.ac.jp

## 研究発表要旨

仲尾 周一郎 (京都大学 (院)) (司会 神山孝夫 (大阪大学))

### アラビア語ピジンの歴史的再構 —19 世紀末南スーダンにおけるビンバシ・アラビア語—

2011年7月に独立した南スーダン共和国でリンガフランカとして話されているジュバ・アラビア語は、19世紀末のエジプト領スーダン赤道州におけるエジプト軍（スーダン南西部や南スーダン出身の元奴隷によって構成）内で発生した、ビンバシ・アラビア語またはモンガラ語と呼ばれるアラビア語ピジンの末裔と考えられている。

本発表では、文献資料の分析や現存の言語であるジュバ・アラビア語やヌビ語（20世紀初頭以降にビンバシ・アラビア語から分岐したアラビア語クレオール）の記述研究に基づき、ビンバシ・アラビア語の歴史的再構を行う。その過程で、①当時の駐スーダン・エジプト軍内で特殊なアラビア語社会方言が発達し、そのアラビア語変種がビンバシ・アラビア語の語彙供給言語 (lexifier) となった蓋然性、②内部に多様な変異が共存した祖体系 (=ビンバシ・アラビア語) が再構できることなどを論じる。

劉 洪岩 (九州大学 (院)) (司会 金水 敏 (大阪大学))

### 中世から近代までのヲ格複合助詞の文法化の特徴について

本研究は主に中世から近代までの史的文献を使用し、この時期におけるヲ格複合助詞の文法化の特徴を明らかにすることを目的とする。この時期には、以下のようなヲ格複合助詞の文法化の特徴が観察できる。まず中世以前には一部のヲ格複合助詞の文法化がほぼ完了したが、この時期には「すらを」、「あるを」などの用言中心のヲ格複合助詞が消滅する一方で、「ところを」、「それを」などの体言中心のヲ格複合助詞が新たに文法化する。

次に、「しかるを」、「さるを」などのヲ格複合助詞は接続助詞的な機能から、接続詞へ変化し、一方向性仮説に反する接辞から接語への変化が発生する。それから、ヲ格は接続助詞の機能がなくなりつつあるのに対し、ヲ格複合助詞は逆説接続助詞的な機能を表している。

これらの現象の原因はその時期の統語特徴の差異によるものであり、形態上、文法化のメカニズムとされる再分析と類推の過程は異なるのである。結論として、文法化の要素として、各時期の統語機能が変化するにつれて、再分析と類推の働きかけの度合いが変わるのであり、類推の方向性と文法化の動機付けも異なった特徴づけが見られる。

#### 参考文献

- 1 金水敏 1993 『古典語の「ヲ」について』 「日本語の格をめぐって」 くろしお出版
- 2 此島正年 1952 『助詞「を」の歴史』 「金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢」三省堂
- 3 松木正恵 2006 『複合辞研究と文法化』 「複合辞研究の現在」 和泉書院

齋藤 有哉 (京都大学 (院)) (司会 神山孝夫 (大阪大学))

### 歴史言語学の方法論的基礎

歴史言語学は言語学そのものの成立に大きく寄与したが、その一方で、残念ながら現今の言語学の潮流のなかで中心的位置を占めているとは言い難い。このような中でこそ、伝統的な歴史言語学が拠って立つ基盤を明示するとともに、歴史言語学が「言語」の「歴史」を「科学」的に解明する学問であるということの意味を、歴史学や科学哲学の知見を借りながら問い直してみると、これまで試みられてきた歴史言語学の方法も概して積極的に再評価できることを示す。すなわち、綿密な比較を通じて最も有効な説明を求めるという姿勢は堅持しつつ、「有効」とはどういうことか、つまりそれらの仮説間の優劣の差を、可能な限り客観的に評価するための手法は歴史言語学以外の分野からも広く取り入れるべきであると主張する。多くの言語はもちろん、言語接触や数理的手法なども積極的に視野に入れ、分析だけでなく総合も行うことが生身の言語にせまる重要な方途であろう。

黒木 邦彦（甲南女子大学）（司会 金水 敏（大阪大学））

### 日本語の過去表現の構造とその変化

本発表では、日本語の過去表現の構造とその変化を辿る。本発表の目的は、言語学的に有益な資料を日本語史の中から掘り起こすことにあるが、それだけでなく、日本語研究の質的向上に貢献しうる、一貫性、経済性、汎用性の高い記述文法を提案することにもある。

日本語の用言は統語的職能を契機として様々に屈折するが、種々の屈折形は、大まかには終止形、連体形、連用形に類別できる。現代日本語では、終止形と連体形を兼ねる  $-(r)u$  形と  $-(i)ta$  形が〈非過去：過去〉で対立するが、日本語において印欧諸語の時制 (tense) に通じる文法範疇が形成されたのは、比較的最近のことである。かつては派生接尾辞によって過去の意味を付加していたため、過去表現は語形成上必須のものではなかった。

日本語の用言に関して言えば、語形成の手段が派生から屈折に変わるということは、そのために用いられる接尾辞の出現位置が語中から語末に移行することを意味する。文の階層性に着目すれば、この変化は命題からモダリティーへの変化とも言いうるので、本発表で取り上げる問題は、形態統語論の分野に留まらない。

菅野 開史朗（ラトビア大学）（司会 井上幸和（神戸市外国語大学））

### エンゼリーンス没後 50 年によせて

ラトビアの言語学者ヤーニス・エンゼリーンス (Jānis Endzelīns, 1873~1961 年) は、88 年の長い生涯において数多くの業績を残し、その研究対象はバルト語比較文法、バルト・スラブ語比較文法、ラトビア語方言学、ラトビア地名研究など広い範囲に及んだ。また、自らラトビア各地を回って収集した膨大な方言データをもとに、ラトビア語正書法の策定や標準語の確立にも尽力した。

エンゼリーンスが活動した時代は帝政ロシア、ラトビア第一独立期、ソ連時代にあたり、その舞台はタルトゥ、ハリコフ、リーガに及んだ。それとともに、当時の欧州・ロシア言語学の趨勢と、故国ラトビアをめぐる激動の政治・社会情勢に翻弄されるも、不屈の姿勢を貫いた生涯でもあった。

本報告では、エンゼリーンスの遺した研究の足跡をたどり、その業績の今日的な意義を再確認するとともに、今後の研究の展望を考察する。

大塚 恵子（東京造形大学）（司会 岡島昭浩（大阪大学））

### 言語接触を想定した日本語方言アクセント史の試み

日本語方言の多様なアクセント体系に関して、それら相互の歴史的関係を論じた二つの説を概観し、そこでは考慮されていない (タイプの) 「言語接触」を想定した日本語方言アクセント史の試みを提案する。取り上げる論の一つは、平安時代京都アクセント体系が最も古い形で、アクセント型の数を多く持つ複雑な体系であるとする。歴史的にはアクセント型が合流し一つのアクセント体系が持つ型の数を減らしながら、各地に伝播、変化してより単純な体系ができてゆき、現在の多様化を生んだとする。いま一つは、もともとは日本全体がすべて弁別アクセントを持たない言語だったが、中央部に声調言語的特徴を持つ言語が入り込み、それと接触した地域の言語が弁別的アクセントを順次獲得し、それが周縁部に及んでいく、しかし獲得しなかった地域もある、とする。本発表ではそのどちらでもない、北からと南からの集団的な人の移動によって起こったと想定しうる言語接触とアクセントについて、試論を提案する。いくつかの典型的な方言・言語をとりあげる。日本語方言アクセントの検討では、ほとんどの場合領域外とされるアイヌ語アクセントをも視野に入れる。

本城 二郎 (大阪大学) (司会 岡本崇男 (神戸市外国語大学))

## チェコ語単文の歴史的変化とプラハ言語学派

### ー 時代別チェコ語訳聖書テキストの要素分割性と機能構造を中心として ー

チェコ語は、形態レベルでは、(古スラブ語起源の) 完了を表わす分析過去形や未来を表わす新しい分析未来形、(ラテン語起源の) 新しい分析受動形と(古スラブ語起源の) 伝統的な再帰受動形の併用、それに加え(複合形式としての) 分析的条件法、さらには、法(助) 動詞・述語・小詞の分化など、スラブ語の中でも多様な分析的形態法を発達させる一方、統語レベルでは、(古スラブ語起源の) 主語項欠如の無主語文や主語項非表示の非人称文から主語項表示形式の人称文への変化による単一要素文から2要素文への傾向と平行して、前倚辞役割を持つ助動詞要素の文第2位置固定および他要素の位置可動性により相対的自由語順を示すことから、所謂 FSP 要件(つまり文要素の Th テーマー-Tr 移行-Rh レーマ分割)を満たす機能構造を実現してきたことが知られている。

本論は、チェコ語単文で汎用される文タイプの一つとして、2要素文がいかなるプロセスで単一要素文から変化したのか、またいかなる要因で2要素文として残ったのか、文要素分割性の変化および対応する機能構造の変化を明らかにすべく、時代別チェコ語訳聖書テキストの比較分析を行う。

その際、分析法としては、プラハ言語学派の言語理論を特徴づけると見なされる主要な2つの理論、すなわち(V. Mathesius から J. Firbas へと発展を見た) FSP 理論と(F. Daneš により完成された)チェコ語文型理論の適用が試みられる。

なお、本発表では、類型論的な観点からも、西欧諸語を特徴付ける SAE(標準均一欧州語)の“形式主語(S)+定動詞(v)”シンタグマ固定タイプを対極として、中欧諸語の中でも SAE を指向するゲルマン化スラブ語の一つとしてチェコ語が設定可能であることも明らかにし、プラハ言語学派の機能的類型論の有効性を検証する。

Mark Irwin (山形大学) (司会 岡島昭浩 (大阪大学))

## Replication of Epenthetic Vowels in Japanese Loanwords from the 16<sup>th</sup> to the 21<sup>st</sup> century

Japanese loanword borrowing phases can be broadly divided into three chronological stages: (i) Iberian (mid-C16<sup>th</sup> – mid-C17<sup>th</sup>), (ii) Dutch (mid-C17<sup>th</sup> – mid-C19<sup>th</sup>) and (iii) Western (mid-C19<sup>th</sup> to present). In the earliest phases replication of epenthetic vowels (earlier labelled as ‘vowel harmony’ or ‘assimilation’ by scholars such as Ichikawa (1930) or Doi (1933)) occurred with considerable frequency, to the extent that it was the unmarked pattern of adaptation: e.g. *keredo* from Por. *credo*, *kirišitan* from Por. *crisťão*, *ekerešia* from Lat. *ecclesia*. Here, the epenthetic vowel is identical to that found in the succeeding, or less frequently, preceding mora. By the Dutch borrowing phase, only remnants of vowel replication are found: e.g. *garasu* from Du. *glas*, *taraQpu* from Du. *trap*. By this period, epenthesis of the high vowels *u* or *i* had become the norm. By the 21<sup>st</sup> century, only scattered vestiges of vowel replication are evident and the phenomenon has become highly marked. What is notable, however, is that these vestiges are almost entirely confined to borrowings from German, Dutch and Arabic and occur only after a donor velar or pharyngeal fricative: e.g. *rihiteNšutaiN* from Ger. *Liechtenstein*, *baNgoQho* from Du. *van Gogh*, *fataha* from Ar. /fatah/. This paper will argue that vowel replication has been kept alive in such borrowings thanks to ‘dictionary traditions’ formulated and passed on by Japanese foreign language scholars. These dictionary traditions differ according to donor language and are the most salient evidence of the primarily distant, and overwhelmingly orthographic, borrowing that has characterised the last four centuries of borrowing into the Japanese language.



田口 善久 (千葉大学) (司会 藤井文男 (茨城大学))

### ミエン語系諸語の系統と分類について

本稿は、ミエン語系諸語の系統樹構築と系統分類の試みである。ミエン語系諸語は、ミャオ・ヤオ語 (Hmong-Mien languages) とよばれる言語群に属する言語群である。これまで、いくつかの先行研究により系統分類が提出されてきているが、それらには分類基準の質の問題、数量の問題、さらにホモプラシーの問題が存在する。本稿では、これらの問題に対して一定の対処を試みた上で、音韻における改新の共有と最節約原理に基づいてこの言語群の系統樹を構築するとともに、それに基づいた新しい分類を提案する。具体的には、まず、ミエン語祖語から現代諸語への複数の改新変化がどのように各言語に共有されているかを調べ、次にそれを本稿で仮定する最小近隣言語で共有されているかどうかによって選別する。選別された改新にもとづいて系統分類を行う。分析の結果、従来の王、毛 (1995) あるいは 毛 (2004) の並列的な分類ではなく、より階層的な分類ができることが分かった。

毛宗武 (2004) 『瑤族勉語方言研究』民族出版社。

王輔世、毛宗武 (1995) 『苗瑤語古音構擬』中国社会科学出版社。

山泉 実 (東京外国語大学) (司会 町田 健 (名古屋大学))

### 「気に入る」の項の格の変異と語彙化

「気に入る」の項の格標示として、以下のパターンが通時的に観察される。(a, b は現代語では稀。また、主語が a/b と c/d では入れ替わっている。)

- (1) a. この本が太郎の気に入った。
- b. この本が太郎に気に入った。
- c. 太郎は/がこの本が気に入った。
- d. 太郎がこの本を気に入った。

類似の変異は、「手に負えない」「目にとまる/とめる」など多くの慣用句でも見られる。また、a, c, d のような格パターンは、受動態の所有者繰り上げ、「一変する」などサ変動詞の一部でも観察される。

このような変異は、いつ、なぜ、どのように生じたのか。本発表では「気に入る」を取り上げ、江戸時代 (小説)、近代語形成期 (『太陽コーパス』他)、20 世紀中盤 (国会会議録)、21 世紀の用例を調査した結果を発表する。特に、「気に入る」等にもみ b パターンが観察される理由として、「気に入る」が一語の動詞に語彙化したことを挙げ、それに伴う現象を検討する。

輿石 哲哉 (実践女子大学) (司会 服部義弘 (静岡大学))

### 英語の語形成史と形容詞のタイプについて

本発表では、Koshiishi (2011) の議論をもとに、英語の形態論史を総括し、本来語系とラテン語系の2つの語彙層が英語の形容詞のタイプにどのように反映しているか考察する。

通時的に見ると、英語の本来語の語形成は、基本的に独立語が独立性を失い接辞となっていく点で自然の風化に例えられる。この場合、接辞の多くは元来独立語だったため、派生語に対して明確な意味的な貢献をすることが予想される。

一方、ラテン語系の語形成は、接辞が仮説生成的に分離される人工化によって成立していると考えられるため、本来語系の語形成とは異なり、明確な意味的な貢献が認められないと予想される。

英語の形容詞は、大きく qualitative adjective (性質的形容詞) と relational adjective (関係的形容詞) に大別されるが、本発表では、本来語系の語形成により前者が、ラテン語系の語形成により後者が作られる傾向があることを指摘し、その理由や意味合いについて考察したい。

参考文献

Koshiishi, T. (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Berg, etc.: Peter Lang.

山部 順治（ノートルダム清心女子大学）（司会 町田 健（名古屋大学））

### 日本語で現在進行中の語順変化

現在、「複合動詞（V1-V2）の使役あるいは受身（s）」という意味〈〈V1+V2〉+s〉を表す形式として、二語順が観察される：/V1-V2-s/（意味を反映した語順）；/V1-s-V2/（意味と食い違った語順）。例えば、監督が選手たちを競争〔し合わせる～させ合う〕。

この語順変異は、文法領域的に広がりを持つ：三要素 V1、V2、s のいずれについても、当てはまる語は、固定した一つに限定されず、特定範囲の複数にわたる（山部、2001年6月言語学会）。

本発表は、現在において、同語順変異が“広がり”の一方で“偏り”をもって分布している状況を、話者の世代差および文法的な特徴（主に、V2に当たる語）を軸にとって、記述する。それに基づき、通時的に現在をまたいで、組織的な語順変化が進行中だと推定し、その進展を方向と順序に関して再構成する。また、推定した通時的变化について、組織的な語順変化の他事例（英語の助動詞が関わる事例、バンツー諸語の動詞派生接辞が関わる事例）と対照し、共通点・特異点を指摘する。

織田 哲司（東京理科大学）（司会 鈴木誠一（関西外国語大学））

「流れる」、「切る」、「強い」を表す印欧語根の音象徴性について：

### *Beowulf*における語頭音 fl-, sc-, wac-などの用例とともに

印欧祖語の (s)k- という語頭音をもつ語根 \*(s)kel-, \*sek-, \*sked-, \*skei-, \*skep-, \*sker-, \*skreu-, \*skribh-, \*kel-, \*kes- などに対しては「切る」という意味が、また \*weg- には「強い、生き生きとした」という意味が、そして \*pleu- には「流れる」という意味がそれぞれ措定されている。今回の発表ではまず、以上のような語根の音と意味の関係を日本語の擬音・擬態語を参考にしながら考察する。そして次にこれらの語根から派生した古英語が頭韻詩 *Beowulf* のなかでどのように用いられているのかについて目を向け、/sk/ と「切る」、/w-g/ と「強い、生き生きとした」、また /pl/ と「流れる」の間に作詩上の音象徴性が見いだされるかどうかを検証する。詩人が頭韻を作るために単語を選択するとき、詩人が語りたい意味内容と音の間にはどれぐらい濃密な関係があるのかどうかにまで考察を深めてみたい。

山口 和彦（札幌医科大学）（司会 松村一登（東京大学））

### アジアの言語に見られる可能形式の文法化

西洋言語では知識（英 can）や力（仏 pouvoir）に関連する語彙から可能が文法化したことはよく知られている。Bybee et al. 1994等では、これを汎言語学的に主流な文法化であるとみなして理論を構築している。しかし、日本語のデキルのようにこれに該当しない可能形式は多い。そこで本発表は、日本語を始めとするアジアの言語の分析から、西洋言語とは異なる可能形式の文法化の型が存在することを主張する。アジアの言語においては5種類の主要な文法化の型が観察される〔状態型・自発型・入手型・成功型・テリック型〕。

さらに可能概念は3つの下位部門〔（1）可能の理由や条件、（2）潜在性、（3）最終局面〕に分けることができる。すると、アジアの言語は可能概念の（2）と（3）に着目して文法化する傾向がある一方、西洋言語では主に（1）に焦点を当てて文法化する傾向が見られる。これらの議論から西洋言語とアジア言語で文法化の傾向が異なることを主張する。

江藤 裕之（東北大学）（司会 鈴木誠一（関西外国語大学））

### 語源学における science vs. imagination —「イメージの語源学」再考—

言語学は「科学」の一部門として位置づけられ、言語の歴史的研究にも科学的な厳密性が要求されている。それ自体は学問（科学）のあり方として否定するものではないが、その一方で、言語研究、とりわけ語源の研究において想像力や直感（直観）が意図的に軽視、ないしは排斥されるのは残念なことである。たとえば、Kluge のドイツ語語源辞書の異なる版を比較してみると、版が新しくなればなるほど（特に、Elmar Seebold による改訂以降）、語源不詳という記述が多くなってきている。語源辞書においては、有力な仮説を紹介することは、たとえ、それが科学的に実証されていないものであれ、必要であろう。言語の歴史的研究、なにかんづく語源研究において、想像力や推理力（類推力）といった要素を見直すべきではないかという点を、いくつかの具体例をもって考えてみたい。

渡部 正路（司会 板橋義三（九州大学））

### 日本語語彙の生成構造

任意の語彙をピックアップして論じるのは恣意的になりやすい。本論は、日本語の生成的構造を問題とするが、上代語の語彙リストを分析対象とし、そこに内在する規則性・法則性を解明することにより語彙構造論を立てる。

日本語の語彙リストというと、数千語と考える人がいるかもしれないが、じつは動詞・名詞とも3音節以上の語は、より単純な要素を組み合わせられて構成されている。3音節動詞について10類型、3音節名詞について6類型を示す。従って、起源論として問題になるのは2音節以下の語であって、分析対象の語彙リストといってもそう複雑なものではないことがわかる。

2音節語についても語構成の類型化が可能で、2音節動詞は4類型、2音節語名詞は5類型である。また語生成の際には母音の役割が重要で、機能性母音について論じる。

田中 俊也（九州大学）（司会 菅原和竹（宮城教育大学））

### ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数形をめぐる考察

ゲルマン語強変化動詞の過去形については、印欧祖語の完了形を継承しているという考えが一般的である。強変化動詞 I, II, III 類の過去形については、単数形・複数形双方ともこの見解から簡明な説明が可能である。しかしながら、強変化動詞 IV, V 類については、その過去複数形では延長階梯の母音 (PGmc. \*-ǣ-) が語根に生じ、印欧祖語では語根母音がゼロ階梯となる完了複数形とは、形態的に一致しないように見える。この点についてどのような説明ができるか、これまで様々な学者が提案を行ってきた。それらの説についてどのような未解決の問題が残っているかを、本発表では考察したい。同時に、従来の説とは異なる新たなアプローチとしてどのようなものが可能かという点についても、考えてみたい。

野田 恵剛 (中部大) (司会 板橋義三 (九州大学))

### 日本語における古代漢語借用語と日本語の系統論

日本語には漢字とともに漢語借用語が多く流入していることはよく知られている。しかし、多量の漢字の導入以前に比較的多くの漢語が日本語に入っていることはあまり知られていない。「梅 (うめ)」、「馬 (うま)」などは有名な例で岩波の古語辞典にもその旨の記載がある。

実はカールグレンが20世紀初頭に日本語における古代漢語からの借用語を15個ほど指摘しているが、これに対し亀井孝が反論し、この議論は沙汰済みとなっている。しかし、最近小林昭美が日本語の中に多量の古代漢語借用語を「発見」したが、まだ一般の注目を集めるには至っていない。例えば「たけ」(竹)は従来ヤマト言葉と考えられているが、音読みの「ちく」と比較すると take: tiku で子音の骨格は同じで、両者の類似性は著しい。同じことが、「きぬ」(絹)についてもいえる。このような借用語の例は小林の指摘するものだけでも200は下らない。今後の調査でその数は増えるであろう。

もし以上の点が認められれば、日本語の系統論を考えると、このような古代漢語の借用語を排除して比較を行わなければならない。さもないと比較の議論が間違った方向に進んでいく可能性があるからである。

清水 誠 (北海道大学) (司会 石井正人 (千葉大学))

### ゲルマン語の「n の脱落」と形容詞弱変化の「非文法化」

印欧語としてのゲルマン語特有の革新に、個別化・限定を表す「n- 語幹」を名詞派生という語形成手段から形容詞の「弱変化」という語形変化の範疇に拡張した点がある。古ゲルマン諸語の形容詞の「強変化」には、本来の名詞変化に代名詞変化が浸透している。代名詞変化は同じく限定の意味を担っていたと推定されるが、弱変化は限定の意味を表す新しい手段になり、強変化は非限定の意味を表す場合に限られるようになった。しかし、指示代名詞から定冠詞が発達するにつれて、弱変化は限定の意味を失っていった。古ゲルマン諸語にはこの発達の過程が反映されている。さて、一般に n は音節末で失われやすい子音であり、ゲルマン語では種々の「n の脱落」が見られる。本発表では「n の脱落」が後続音の種類に応じて規則的に起こるルクセンブルク語、名詞を修飾する形容詞の語尾が強変化・弱変化の区別なく音節構造に従って機械的に付加されるアフリカーンス語など、現代ゲルマン諸語の例を検討する。それを通じて、形容詞強変化・弱変化の「非文法化」のプロセスをたどりたい。

日本歴史言語学会

<http://www.jp-histling.com/>

暫定事務局

〒560-8532

大阪府豊中市待兼山町 1-5

大阪大学文学研究科

神山孝夫研究室内

kamiyama [at] let.osaka-u.ac.jp